

嵐牛 友の会便り 第十八号

2020.5.1発行

〒436-0004

掛川市八坂434-1

嵐牛俳諧資料館

伊藤鋼一郎

携帯番号

090-1472-2972

Eメールアドレス

takumise@

titan.ocn.ne.jp

目次

- [1]令和二年五月
友の会中止の
お知らせ
伊藤鋼一郎
- [2]柿園友垣抄(16)
— 門人雪香旧蔵俳書
加藤定彦
- [3]講読・鑑賞の会
今後の予定
- [4]柿園近影

令和二年五月 友の会中止のお知らせ

伊藤鋼一郎

新型コロナウイルスの流行で世の中が混乱していますが、皆様お元気で
ようか？ 百年ほど前に感染が広がったスペイン風邪では、当時の内務省統
計によると三十八万人の日本人が亡くなったそうで、私の父親の兄も小笠原
学校（現小笠総合高校）在学中に犠牲になりました。今回はそれほどまで
はならないと信じていますが、感染拡大の勢いは止まらず、掛川市内でも二
十六日(日)までに三人の感染者が出ています。全国に発出された緊急事態宣
言も、今のところ五月六日までとされていますが、期限を延長する可能性も
高いようで、全国の学校の始業を四月から九月に変更しようとする動きまで
あるようです。このような社会情勢の中、人が密集する会は自粛すべきな
で、五月の友の会は中止といたします。コロナウイルスの流行が収まりまし
たら、次回十一月には開催する予定です、それまでお待ちください。

最近、加藤定彦先生よりうれしいメールが届きました。『続・柿園嵐牛俳
諧資料集』の企画がほぼ固まったとの連絡で、倉島先生との共編、二年後の
春の発行を予定しているそうです。以前、加藤先生から三冊纏めたいとい
うお話を伺っていましたが、実際に纏めるとなるとハードルは高いのではと
懸念しており、まさか実現するとは思いませんでした。一冊出すのも大変で
すのに、大感謝です。三冊目は嵐牛俳諧資料館所蔵の依平資料を中心にした
もので、当地の国学者である依平の研究にとっての根本的な文献を提供した
いと考えています。幸い、国学が専門の高松亮太先生が広島県立大学から東
京の東洋大学に移られ、三冊目の本を纏めてくださるそうです。二冊目と同
時に出版できればベストです。高松先生よろしくお願ひします。

桜の季節になると、我が家では筍、独活が食卓に上がり、家族皆が春を実
感します。筍は逆川脇の竹藪から、独活は三十年ほど前近くの山から畑脇に
移植しました。筍も独活も酢味噌を掛けていただいています。



(嵐牛友の会・会長)

柿園友垣抄(十六)——門人雪香旧蔵俳書

加藤 定彦

前回は雪香兄弟と島田の嚶々連、新収雪香宛書簡の内訳の概略を記した。今回は、書簡に続いて古書市場に出た雪香旧蔵俳書の概略を記し、その内の一冊に収録される嵐牛資料、清民句稿評について紹介したい。

雪香旧蔵、明治俳書の概要

出現した雪香旧蔵俳書は、昨年六月下旬、東京古書会館で催された新興古書大即売展に出品のもので、上旬に出品略目録(全一二四ページ)が拙宅に届いた。早速、俳書の仕入れに熱心な文行堂のページを開くと、遠州や尾三兩州を中心とする明治期旧派の俳書、

暮雪集 而后句建碑 明治二十年自序刊

みらしをり 安間木潤編 明治二十六年自序刊

一道居稔春発句集 稔春著 明治二十七年其鳳序刊

不昧集 静処追善 明治二十七年秀石跋刊 尾張熱田

金光集 安間木潤古稀賀 明治二十八年湛水序刊

蓬宇居士追善集 杜堂編 小野湖山題 石川鴻斎序 松浦羽洲跋

明治二十九年序跋刊

せみのこゑ 稔春一周忌追善 北川ちか編 明治二十九年眉山序刊

雪みくら 清民三十回忌追善 壮山編 素石園序 明治三十年刊

残香 蓬宇大祥忌追善 素信編 明治三十年羽洲跋刊

にしのひかり 酔雨七回忌追善 可洗編 明治三十二年羽洲跋刊

いはたのふじ 液雨編 明治三十三年夷吉序刊

山より水 足立湛水編 明治三十三年自序刊

木潤発句集 安間木潤編 自序 明治三十五年刊

知碩発句集 早苗庵知碩著 秋野湖洲編 明治三十五年湛水序刊

涼石集 完伍追善 小伍・珪史編 明治三十五年羽洲序刊

とふたふみ 足立湛水編 明治三十六年安間木潤跋刊

するがしふ 有嘉園雪香(秋野橋太郎)編 西有移山題

明治三十七年羽洲序刊

霜廻眺 梅裡三十七回忌追善 小川清美編 明治四十二年大口鯛二序刊

春谷発句集 大竹春谷著 小野湖山序 明治四十三年刊

静岡県磐田郡福島村

など二段組みニページに百点余が並んでいて仰天した。注文の本が届き点検したところ、皆保存がよく、予慮通り袋の多くに「(秋野)雪香様」と宛名付箋があり、ご子孫が書簡などと一緒に処分されたようである。

嵐牛評清民句稿

清民評の嵐牛句稿を本コラム(十三)で紹介した。ところが、今回文行堂から届いた俳書『雪みくら』には、口絵に清民句碑、巻頭に「遺噺」を収録、なんと、その後半は嵐牛評の清民句稿(三十四句)であった。二人が「知音」の仲とよく判る絶好の資料なので、早速、抜萃して紹介したいと思う(句番号は出現順を示す)。

君見ませ雨の田植のはだか蓑 清民



壮山曰、遠州知碩氏(嵐牛門四天王の一人)、其師嵐牛老がわが師清民翁が句を評せられし草稿を乞得て一軸となし、久しく文庫に秘め置れたるを、さきに予以譲与せられたり。

その意は、碩氏已

に米寿にちかき高齢なれば、行末をおもひはかりての心尽しなりけらし。

されば、こたび、たま／＼追善集をものせるものから、そが評語を下にか

、げて、両師が交りの深厚なりしを表し、併せて碩氏の芳情に酬ひんとす。

② 菊の香やあれてゆかしき庵の庭

在に談ずると、他処にある友を思ふに、其家に同士を携て遊ぶと、いづれ楽

しからん。その楽み言外にあふる。あ、浦山しの友也、吟也。

③ ぶす／＼と藻屑はもえて秋の暮

花もみぢも浦の苦屋も思はせたる手段、いかさま心術なる哉。さて彼(定家)

卿が糟粕といふ論も有べけれど、そこはのがれたりといはん。翁が古池も山

家集の浅揉すれば、先蹤たしかなるやうなれども、必一等の手際あるなり。

是はいふ迄もなけれど。

④黒塚にたゞしら露の夜明かな
観相五文字、一字に古今・自他徹底す。殊に句面安らかにいひ下したる、老練ならでは得がたしといはん。

(注) 古池の句は「みさびみて月も宿らぬ濁江にわれ住まんとてかはづなくなり」(『山家集』)に拠る、との説がある。

⑦春風になりぬ割子の飯の味

早蕨の塩や辛かりけん。独活加の酢やぬるかりけむ。引敷ものはせまくもあれ、百里を隔て我、この味には唾をこそそのめ。

(注)「割子」は、普通「破籠」か「破子」と書く。食物を入れる容器。「独活加」はウドの方言か。鹿児島県にウドを「うどかん」「うどっかん」という地区がある(『日本国語大辞典』)。「引敷もの」は敷物に同じ。(解)春風が吹くにつれ、料理の味も季節を反映し、春らしくなる。

⑩秋の夜はしらね都のはるの月

春秋のおかしみ猶秋夜のさびを忘れぬ雅腸、此翁、にくむべし。但、此「しらね」を己には「しらず」と有たし、と思へるは如何。是も一是非なるべき歎。必々圭角なしに聞置給へかし。

(評)「しらね」と已然形となつてゐるのを「しらず」と終止形にすべきだと主張。依平に国学を学んだ嵐牛らしい指摘である。「必々圭角なしに聞置給へかし」と一言添えてゐるのが可笑しい。

⑫とろ／＼と笈は落て梅の花

言外落梅見るが如し、とみるは非か。自が此閑寂、舌頭に人の腸を寸々に断しむるくせもの、太河龍原なほにぶしとせん。

(注)「太河」は「太后」とも読めるが、意味不通となる。「龍原」は、白染天の「故元少尹集詩」を評した、「軸々金玉声、龍門原上土、埋骨不埋名」による造語か。龍門は黄河中流にあり、龍門山を越えて落ちる滝。

鯉がこの滝を登り切ると龍になるといわれ、登龍門の語が生まれた。(評)笈から水の落ちるのを龍門の滝と対比させた着想は非凡ではあるが、凝り過ぎて難解な評言となった。

⑱大切な寒さになりぬ梅の花

老倦君籠の意、こもれりとする歎。こゝろ深くきこゆ。(解)寒威に尻込みしつつも、梅の花には「大切な寒さ」だと言ひ聞かせる老俳のあやにくが面白い。

⑲梅が香や犬のとがむる闇の中

広く幽深なる方に心ひかるとよ。己も君の意におなじ。

(評)「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる」(『古今集』)の古典世界を、鋭敏な動物の感覚(嗅覚・視覚・聴覚)の世界に転じた作。それを嵐牛は「幽深」に惹かれる心性の投影と捉えたのである。

⑳世の中を障子ひと重や明の春

「住ばまた浮世なりけり」と古人の詠に解悟せしや。たゞし、四条五条の橋の上のしたはしきにや。人を深山樹に見んとはにくし。云々

(注)「住ばまたうき世なりけりよそながら思ひしままの山里もがな」は『新千載集』所収の兼好法師の詠。『和漢文操』『鶉衣』などにも見え、有名。

(解)大晦日の世間と新春の飾り立てをした部屋は時間や藪と晴の境界であっても、空間的には僅か「障子一重」でしかない。焦点の当て方が的確である。

㉑梅が香や門に待子の顔見ゆる

待ん頃帰り、かへらん頃は待慈父・孝子、道ある哉、歎あるかな。

(評)情愛に裏打ちされた孝道の称揚が気持ちよい。

㉒元日に五風十雨の祈りかな

こは、今人、古しといふべし。己に此春、「織て着て作て食て御代の春」とせし也。貫之、「あはれてふことにしるしはなけれどもいはではえこそありぬものなれ」(『後撰集』)、心に味はふ事、いかでいはでや止べき。このさび、不し論新古して甘心。

(注)「五風十雨」は『論衡』の言葉。五日毎に風が吹き、十日毎に雨が降る順当な天候。太平の世をいう。

君、折々古調の吟有。己もをり／＼試す。扱、古調の句を見てふるし／＼と一向にいふは、俳諧者流の癖なり。古き中にふるきあり。又新しきあり。歌人、古調一方を好みてよむ人あり。されど是を古しといふ声を聞ず。詩また然り。されど、是古しと旬良す(声高に言う)。ふるしといふは、新古をも弁へずしていふ人は兎も角も、弁有者に向て論ずるは、却て新古をしらぬに似たり。近きむかし、蓼太、成美、道彦、次には家松あたり迄は天和、貞享調、あるは俳諧の催馬楽など、さまざま洒落も題して理はらずとも、こは何調と合点すべきを、唯ふるし／＼と声高にの、しるこそ聞にくけれ。

(評)以上、二人だけでなく、幕末維新期の作風・俳諧観を窺う好資料でもある。

(嵐牛友の会・顧問)

『柿園嵐牛俳諧資料集』ご案内

購入希望の方は、嵐牛友の会会長
伊藤鋼一郎までご連絡ください。
頒布価格は一部五〇〇〇円です。



講読・鑑賞の会 今後の予定

第二十一回 五月十七日(日)

中止

第二十一回 十一月十五日(日)

会場 嵐牛俳諧資料館和室 八畳十六畳
時間 午後一時三十分～四時三十分
内容 加藤定彦先生講話
嵐牛門人短冊講読

石川依平「宇津の山越」講読

※ 友の会に対するご要望などをお聞かせください
また、友の会会員の方、その他嵐牛繋がりで面白いこと
がありましたらご投稿ください。

※ 嵐牛の俳諧資料を探索しています。
とくに、明治期の柿園評月並句合の摺物について、
ご所蔵先などご存じの方がいらっしゃいましたら
ぜひ情報をお寄せください。



青空 ソメイヨシノ 通行人も思わず足を止め

昭和二十九年 掛川市市制施行記念植樹（東山口村掛川市編入）

令和二年四月六日 撮影 事務局 伊藤英子